

『倭歌藻塩草鈔』現代語訳・解説

佐々木 人 美 *

〔はじめに〕

この現代語訳・解説は、後藤逸女研究者である高橋傳一郎氏、および当館の中村美也子学芸主事の翻刻に基づいています。

一人でも多くの人に、秋田の先覚の一人である後藤逸女の和歌を知ってもらいたいと考え、中学生が読んでもおおよその理解ができるよう、次のような配慮をしています。

・音読する際の参考となるように、現代仮名遣いでルビをふってあります。和歌の題も、実際には音読されたものかもしれませんが、意味がわかるように、できるだけ訓読みにしてあります。

・解説を入れることで、和歌に関する基礎的な知識や、和歌の世界での常識が身に付くようにしました。

・原文の一語一語にこだわらず、全体の意味に重点をおいて現代語訳しています。特に主語述語の混乱しがちな倒置表現については、語順を入れ替えたものも多くあります。

以上のことから、和歌に対する解釈が不十分な点も含めて、作品としての和歌を、忠実に現代語訳し解説したのではなく、後藤逸女の和歌に込められた思いを、わかりやすく翻訳したものと考えていただきたいと思っています。

倭歌藻塩草鈔（書き集めた和歌からの抜き書き）

「藻塩草」とは、製塩のために用いた甘藻などの海藻のことです。海水をかけて焼いて煮つめた釜から、塩を「掻き集める」ことから、「書き集む」にかかる言葉として用いられます。「鈔」は「抜き書き」の意味で、後藤逸女が、数多くの自作の和歌から、百二十首を選び出して書いたものです。

逸女草（後藤逸女しるす）

1老にける身のうきふしもわすられて愛る千とせの庭のわか竹
年老いてしまったわが身のつらさなど、自然と忘れてしまう。庭の若竹のように、長い生命を授けられた赤ん坊を、いとしく思いながら見ていると。

この和歌には、「竹」と「節」のように、関係のある言葉が上手に取り入れられています。このような言葉を「縁語」といいます。

2うちつけに雪かすみしは月影に霜をかさねししら菊のはな
ついうっかり、雪だと思って見たものは、月の光の白さに、霜の白さが重なって、ますます白く見える白菊の花でした。

「影」は本来、「光」という意味でした。ですから、「月影」は「月の光」という意味です。その後、光によってできる「影」の意味が生まれます。

井螢（井戸の螢をよんだ歌。以下の和歌について、題を解釈する際には「（を）よんだ歌」は省略します。）

3 山の井にうつるとすれどほどせばみみる影あかず飛ほたるかな
螢の光を、山の井の水に映して見ようと思ったが、山の井が狭いで、飛ぶ螢の光を映して見るには、もの足りないことですよ。

「山の井」は、「山の井戸」の意味ですが、実際には山の中の湧き水や流れる水をいいます。掘った井戸に比べて浅いところから、和歌では「浅い」にかかっていく言葉として用います。この和歌でも、満たされない思いを表現するのに使われています。

立春月（立春の頃の月）

4 おもひきやはるの日数もきのふけふほのみかづきのかすむべしとは
立春から、昨日今日とわずかの日数なのに、もう、ほのかに見える三日月に霞がかかって、ぼうっとかすむようになるとは、思いもかけなかったことです。

明治五年までは、月の満ち欠けを基準として作った旧暦を使っていました。だから、三日の月が三日月になります。「霞」も「霧」も同じような現象ですが、和歌の世界では平安時代から、「霞」は春、「霧」は秋と使い分けられるようになりました。

浦夏月（海辺の夏の月）

5 すゞしさにおもひこがれてあまをぶねつきのみるめを夜たゞかるらん
涼しい夜なのに、恋の火に思い焦がれて、漁師の小舟が海松布を刈るように、月の目や人の目をひたすら避けて、今ごろは恋人同士逢っていることでしょう。

「みるめ」は「海松布」という海草と、他人が「見る目」の二つの

意味を持っています。このような言葉を「掛詞」といいます。他人の「見る目」を刈り取る、つまり避けることができれば、恋人に逢うことができるといいうわけです。

松風驚夢（松風の音で夢から覚める）

6 みし夢はさそひつくして淋しさの枕にのこるまつかぜのこゑ
松風の音が、私の見た夢をすっかりさらっていつてしまっても、さびしさだけは枕に残っています。

「淋しさ」の原因は書かれていないのですが、「松」は「待つ」に通じます。きつと、待っても来ない恋人への思いなのでしょう。

寄月恋（恋を月に託して）

7 おもふその人の面かげ月にみて露おきあかす秋の夜のそら
恋しく思うあの人の面影を月に重ねて、露のような涙を流しながら、夜通し起きて見ている秋の夜の空です。

恋の和歌では、「露」は「涙」のたとえとしてよく使われます。鏡のような「月」には、恋しい人の面影が重なって見えます。

8 みたか狩ありとはしるし浅茅はらかた野に鈴の音ぞきこゆる
高貴な方が鷹狩りをなさっていることははっきりとわかります。茅

が一面に生えている交野に鈴の音が聞こえますから。

「交野」は皇室の狩猟地として知られていました。また、桜の名所としても知られ、よく和歌の題材になりました。このように和歌に詠まれる名所を「歌枕」といいます。

鶯（鶯）

9 すだちてふ名にはおへども春深みかたことなかぬをのうぐひす

小野の里は、鶯が巢立つ里として有名なのに、もう春も深いので、鶯はちつとも鳴かないなあ。

「小野の里」は梅の名所でしたので、梅に縁のある鶯の里としても有名でした。

若菜（若菜）

10をりたちていざやつま、し初わかな浅沢みづのぬるむあたり

水辺に降り立って、さあ、今年初めての春の若草を摘みましょう。浅い沢の水がぬるむあたりで。

春の若草を食べると、その生命力が体に取り込まれ、病気になることなくと考えられていました。その習慣は、今でも「七草がゆ」に残っています。

菫（菫）

11つまでまづひとよはねなんつぼすみれゆかりの色の草枕して

今は摘まないで、まず、今夜は寝ることにしましょう。壺菫の淡い紫色を味わいながら旅先の仮寝をして。

「ゆかりの色」とは「紫色」をいいます。旅先では草を結んで枕にしました。ですから、「草枕」は「旅」「旅先の仮寝」を意味します。

柳（柳）

12青柳のはなだの糸のうつればやなみにあやおる庭の池水

青い柳の、薄い藍色の糸が映るからだろうか。波が美しい模様を織りだしているように見える、庭の池の水です。

「縹色」は薄い藍色。「綾」は美しい模様を織りあげられた絹織物のことです。

若草（若草）

13夏と秋とおのがさまざま咲花もふた葉はおなじのべの若草

春と秋と、それぞれさまざまな形や色に咲く花とはいうものの、ふた葉はみな同じですね。野原の若草を見ると。

「双葉」とは、草木が芽を出したときに最初に出る、二枚の小さな葉のことです。

春山眺望（春の山のながめ）

14めにちかきふもとのさとはうづもれて霞のうへにはる山の端

私の目の前の、麓の里は霞に埋もれてしまっているけれど、霞のとぎれた上の方には、晴れ渡った山の端が見えることです。

「山の端」は稜線とって、山が空に接している部分のことです。

鶯（鶯）

15おのかすむこし路の雪はまだきえじ花みてかへれ春の鶯がね

お前が住む、越路の雪は、まだ消えていないだろう。花を見てから帰るなさいな、春の雁よ。

「越路」とは、今の新潟や富山などの北陸地方のことです。「花」はここでは「桜」です。「万葉集」のころまでは、単に「花」といえば「梅」をさすことが多く、「古今和歌集」の時代になると「桜」をさすようになります。

霞のうちに鶯の鳴をき、て（霞の中で鶯が鳴いているのを聞いて）

16うぐひすの木づたふさまもゆかしきを霞ふきとけ春の山かぜ

鶯が、木から木へとつたつたていく姿が見たいので、春の山風よ、霞を吹き晴らしておくれ。

「鶯」は、春の訪れを告げる鳥です。人々はその鳴き声を心待ちに

していました。だから、和歌には鶯が数多く詠まれています。

春月（春の月）

17 さやかなる秋にもまさるにほひかな霞にこもる春の夜の月

霞に隠れている春の夜の月は、くつきりと月が見える秋にもまさる、つやかな美しさがあるよ。

「匂ひ」には、輝くようなつやかな美しさという意味があります。

行路梅（道ばたの梅）

18 すぎがてにこゝろぞとまる梅の花やどりかるべき垣ねならねど

素通りできずに、梅の花に心がひかれることです。鶯が留まるのにふさわしい、立派な垣根に咲いているわけではないけれど。

春を告げる鶯と、春に真っ先に咲く梅の取り合わせは、古くから和歌の格好の題材でした。この和歌では、鶯を擬人化して、梅の枝に留まることを、宿を借りると表現しています。

風静花盛（風は静かに吹き、花は盛りである）

19 飛鳥かぜあすはしらねどけふはまつのはなはなのさかりをぞみる

飛鳥に吹く風のように、明日のことはわからないけれど、今日はまずそんなことは考えなくて、のどかに満開の花を見ることです。

飛鳥には古い都がありました。飛鳥風というのは、昔を思い出させるさびしい風です。

20 よをいとふ身のかくれがはみねの松かぜのゆききのおとづれもうし世をきらつて逃れたわが身の隠れ家は、峰の松の木です。風が吹いて行き来する、その音が聞こえるのもわずらわしいことです。

「訪れ」は「声をかける」「音をたてる」がもともとの意味で、そ

れから「訪問する」「手紙を出す」という意味が生まれました。

源氏もの語よもぎふの巻を（『源氏物語』の蓬生の巻を読んで）

21 藤のはなみだれて松にかゝらすはわすればつらしよもぎふの宿

藤の花が乱れて松にかかっているのは、もし忘れられたならばつらい、蓬が生い茂った野の家の、場所を知らせるためなのですね。

「蓬生」とは、蓬が生い茂っている荒れ果てた場所をいいます。『源氏物語』の蓬生の巻では、光源氏が蓬生の野に昔の恋人を訪ねます。そのきっかけとなるのは、松にかかった藤の花の香りを、風が運んできたからなのです。

布引瀧（布引の滝）

22 山姫のいつをりためて生田川みなかみしろく布さらすらん

山姫は、いったいいつ、布を織ってためておいたのだろう。生田川の川上が白く見えるのは、山姫が布をさらしているからでしょう。

「布引の滝」は、「生田川」の上流にある滝で、歌枕の一つです。「山姫」は山に住んでいて人を襲うと考えられていた妖怪です。

庭竹（庭の竹）

23 池水にかけをうつして直なるすがたをみする庭のくれたけ

揺れ動きやすい池の水に、その姿を映していてもなお、真っ直な姿を見せている、庭の呉竹です。

「呉」は「中国伝来の」という意味で、「紅」という言葉も、中国から伝わった藍色という意味です。

草花（草花）

24 いづかたもおなじと聞しあはれさへみるにわする、野辺の草花

どこでも同じと聞いて、がっかりした気持ちさえ、見ると忘れてしまふほど、趣がある野原の草花です。

逸女版「世界に一つだけの花」といったところでしょうか。

五月雨晴（五月雨があがって）

25 ほたるかとあやまたれけりさみだれの名残の露にやどる月かけ

五月雨の名残である露に、宿るかのように映っている月の光を、蛍の光かと見間違っしまいました。

五月雨とは陰暦五月ごろの長雨で、今でいう梅雨のことです。その晴れ間が「五月晴れ」です。しかし現在では、「五月の晴れた空」という、本来からすると間違った使い方も定着しつつあります。

夕橋（夕方の橋）

26 ゆふまぐれをすのひまもるそらうきにほひあらそふのきのたち花

夕方の薄暗い時分に、小さなすだれの隙間から見える空模様は、気に入らないけれど、美しさを競うように、軒には橋の花が咲いています。

橋は蜜柑の一種で、初夏に香りの高い白い花が咲きます。時鳥と一緒に和歌に詠まれることも多くあります。

夕橋（夕方の橋）

27 ふきすぎて誰がまくらにかかよふらむはなたち花ののきのゆふかせ

私のもとを吹き過ぎていって、いったい誰の枕に通うのでしょうか。橋の花の香りを運ぶ軒の夕風は。

平安時代の結婚は、男性が女性のもとに通うというスタイルでした。この歌では、「風」にそのような男性のイメージが重ねられています。

山路越鳥（山道を越えて聞く鳥の声）

28 わけこずばいかでか聞かむほと、ぎすこの山本を過るひと声

山路を踏み分けて来なかったならば、どうして聴くことができたのでしょうか。いや、できなかったでしょう。この山のふもとに、響き渡っている時鳥の一声を。

時鳥は古くから夏の鳥として親しまれていました。平安時代には、その初音を聞くのが、大きな関心事となり、徹夜をして待つ貴族などもいたそうです。

橋上堂（橋の上の堂）

29 ゆふまぐれ瀬田のながはしをのれのみ行かたみせとぶ螢かな

誰の姿もよく見えない、夕方の薄暗さの中、瀬田の長橋を、自分だけが行く方向をはっきりと見せて、飛んでいる螢ですね。

「瀬田の長橋」は、琵琶湖から流れ出る瀬田川にかかる橋で、夕暮れの光景が有名でした。

夏月易明（すぐに明ける夏の夜の月）

30 草の葉の露をすゞしとみるほどにはやかけしらむ夏のよの月

草の葉についた露を、涼しさを感じながら見ているうちに、急ぐかのように早くも白々と明けていく夏の夜の、空に浮かぶ月よ。

「夏の短い夜」は、この和歌のように、かなり大げさに表現されることがあります。

貴賤納涼（身分の高い人も低い人も涼しさを味わう）

31 宮人をおもひこそやれ御川みづながれの末もすゞしきものを

宮廷の方々を想像すると、宮中を流れる川の水に、涼しさを感じていらつしやることでしょう。でも、その下流に住む身分の低い私た

ちも、同じように涼しさを味わっているのですよ。

「宮」は「御屋」の意味で、神社の他、皇族の方々とそのお住まいをいいます。

秋夕（秋の夕暮れ）

32 さびしさはいづくも同じ夕ぐれをわが身のあきとなどおもひけむ

秋の夕暮れの寂しさは、どこでも同じだというのに、この秋が自分一人にだけ来たものだ、どうして思ったことでしょうか。

『古今和歌集』に「月見ればちぢに物こそ悲しけれわがみ一つの秋

にはあらねど」（月を眺めていると、あれこれと限りもなく物悲しくなります。自分一人だけに来た秋ではないけれども。）という歌があります。逸女は、この歌の言葉や内容を採り入れて、「わが身のあき」と表現しています。このような方法を「本歌取り」といいます。

鶉（鶉）

33 うき数にきけばあはれぞまさりけるふしみのさとの鳴のはねがき

伏見の里で、鳴がくちばしで自分の羽をしごく音がする。鳴はつらさを覚えるたびにそうするのだと思って聞くと、いつそうしみじみと心にしみることです。

鳴という鳥は、長いくちばしで何十回何百回となく、羽をつくろいます。それがつらさを覚える回数だととらえています。題が鶉となっているのは、伏見には色々な鳥がいたことから、混同したのかもしれない。鶉も鳴も、秋を代表する鳥です。

秋夕（秋の夕暮れ）

34 なげかじとおもひなしてもかなしきは誰がならはしの秋のゆふぐれ
嘆くまいと強く思ってはみるけれど、秋の夕暮れは、やはり悲しく

なってしまう。この習慣は、誰が私の身に付けさせたのでしょうか。

「誰が」とはありますが、なかなか訪ねて来てくれない恋人への、うらめしい思いが読みとれます。

初鴈（初めての雁）

35 ゆふやみに数はみえねどはつ鴈の声するかたにこゝろをぞやる

夕闇のせいで、数は見えないけれど、初雁の鳴き声がある方向に、思いをはせることです。

「雁」は手紙を運ぶ鳥と考えられていました。作者は誰かの手紙を、心待ちにしているのかもしれませんが。

月前搦衣（月を前にして衣を打つ）

36 うち明すきぬたに月の霜のいろをかさねてさゆる麻のさころも

砧を打ちながら夜を明かします。月の真っ白な光も重なって、麻の色が白く冴えわたっています。

「砧」というのは木づちのことで、布をたたいて布地を柔らかくし、つやを出すのに用います。その音は、秋の夜のさびしさをあらわす代表的なものです。「月の霜」という表現は、月の光が真っ白であることを、霜にたとえていったものです。

37 すまの海士の波かけ衣よるはつきをやどしてもしほたるらん

須磨の漁師の、波がかかって濡れた衣は、夜には、月の光を映しながら、海の水をしたたらせていることでしょう。

和歌で、衣や袖が濡れるというのは、涙で濡れるという意味です。

「よる」は、波が「寄る」と、「夜」の二つの意味を持つ掛詞です。「藻塩」は、海藻から採る塩ですが、この和歌の場合は、その時に使

う海水のことです。

田家(田舎の家)

38 ふうかぜも身にさむからじちまち田の稲葉にかこふかりそのいほ吹く風も身には寒く感じないだろうよ。広い田の、稲の葉で囲まれた仮小屋にいるならば。

「千町田」は広い田という意味で、大きな農家の豊かな実りが、目に浮かびます。「庵」は農作業のための仮小屋や、世を捨てた人の粗末な住まいをいいます。

田家月(田舎の家の月)

39 蒔すてし門田の廬に月ぞもるひうち稲のほにやいでけむ

刈り終わつた、門の前の田に立てた仮小屋に、月の光が漏れてくる。その月は、燧岳の稲の穂から出てきたのだろうか。

「燧岳」は福島県にある山で、東北地方では最高峰として有名です。はるかな山から、月が出てくるようすを想像しています。

40 鳴子をばかぜにまかせてよますがらふしみのをだの月をみるかな

鳴子の番は風に任せておいて、一晚中、伏見の里の田に出た月を見ることです。

「鳴子」は、田畑の鳥をおどして追い払うための道具です。小さな板に細い竹つつを掛けて並べてつけ、なわを引いて鳴らします。

月前砧(月を眺めながら砧を打つ)

41 晴る、ほどおもひまされば中々にくもりはて、よ秋の夜の月

晴れば晴れるほど、あの人への思いがつのつてしまいうから、いつそのこと、秋の夜の月なんか、すっかり曇ってしまえばいいのに。

「月」はどこからでも見えます。だから、中国や日本では、遠くにいる親しい人を思わせるものでした。作者も月を見ると、誰かのことが思われてつらくなるのでしょうか。

月(月)

42 月かけは外山にふけて衣うつおとのみ高き燼しの、さと

月の光は、里に近い山に沈んでしまつて、秋篠の里には、衣を打つ砧の音だけが高く聞こえます。

「秋篠」は奈良県にある歌枕の一つで、砧の音や霧の景色などで有名です。

鷹(雁)

43 松風のしらべにつれてみね遠くことちにわたる天津鷹がね

松風の調べにあわせるかのように、山のいただき高く、別の世界へと空を飛んでいく雁よ。

雁などの「渡り鳥」は、空間や時間をこえて、別の世界へと行き来する存在と考えられていました。そこが「異地」です。

44 立きりにみるまほどなくかき、えてよみもとかれぬ鷹の玉づき

立つ霧のせいで、雁の姿を見たものの、すぐにかき消されてしまつて、読みとることもできない、雁が運ぶ手紙ですよ。

「玉梓」というのは手紙のことです。使者が手紙を、美しい梓の木

夏夜(夏の夜)

45 たきすてし賤がふせやの蚊遣火もゆふべのま、にあくる夏の夜

焼き捨ててしまおうと思つた、貧しい私のみすぼらしい家の、蚊遣

火も、夕べのままで消えていないのに、まもなく明けてしまうほど短い夏の夜です。

「蚊遣火」は、蚊を追いかつためいぶすもので、昔は杉の葉や蜜柑の皮などを使いました。

法華堂鶯（法華堂の鶯）

46 あひにあひて聞ものどけし春ごとに来なくみのりの庭のうぐひす
よくもまあ、ぴったりと似合っていて、聞くとのどかであることです。春ごとに來ては鳴く、仏法を唱える、庭の鶯は。

「御法」とは、仏の教えのことです。鶯は、「法、法華經（ホー、ホケキヨウ）」と鳴くことから、仏の教えを学ぶ法華堂には、とてもふさわしい鳥です。

法華堂以下、洲崎、荒沢川、築館野、船代橋、高建寺、八塩山、鳥海を題材にした和歌が続きます。これらは当時「矢島八景」と呼ばれる名所でした。四季折々の和歌が詠まれていることから、逸女は何度かこの地を訪れたと考えられます。

洲崎春信（洲崎の春のしらせ）

47 しめゆひしうちにも外にもほふかなすぎきの春のはなのさかりは
洲崎の春の、花の盛りには、注連縄を張った内にも外にも、花の香が匂っていることです。

「洲崎」は、文献では確認できていないのですが、「注連」を結うのですから、神の領域だったのでしょう。神の恵みが、花の香のようにあふれかえっているようすを詠ったものと考えられます。この地には、桜の老木が枝を広げ、花を咲かせていたといえます。

荒沢川蛩（荒沢川の蛩）

48 あさきせにさばしる鮎もみゆるまで荒沢川によるほたるかな

浅い瀬を、走るように泳ぐ鮎が見えるほどに、蛩が荒沢川に集まって光っています。

「鮎」はその姿の美しさもあって、よく和歌に詠まれました。「魚」へんに「占」と書くのは、鮎がその昔、戦争の勝敗や豊作凶作を占う時に使われる魚だったからです。

築館野航（築館野の船）

49 旅人のよべばいらひてはやきせをたぐりよせたりつきだてのふね
旅人が呼ぶと返事をして、築館の船は、流れの速い浅瀬を、たぐり寄せるように軽やかに進みます。

「築館」には、子吉川、荒沢川、田沢川という、三つの川が流れていました。ここでの主な交通手段は「渡し船」だったのです。

船代橋月（船代橋の月）

50 たび人のゆき、と絶てあり明の月すみわたる舟代のはし
旅人の往来もすっかり途絶えて、舟代の橋には、有り明けの月の光が澄み渡っています。

十五夜を過ぎると、月が出るのがだんだんと遅くなります。そのよな月は、夜が明けても空に残っているので、「有り明けの月」と呼ばれます。

高建寺鐘（高建寺の鐘）

51 松かぜはみねにたゆみてさゆるよのかねの音高し霜の古でら
松風は峰にあたってゆるんで静まり、霜の降りた古寺では、冴えわたる夜の空に、鐘の音が高く響いています。

鐘の音は、人間の欲望や苦悩などの「煩惱」を打ち消すと信じられていました。ですから除夜の鐘も、百八つの鐘の音で煩惱を消滅させるといわれています。

八塩山紅葉（八塩山の紅葉）

52 秋ぎりはよのまに晴てやしほ山ちしほ色こきみねのみぢば

秋の霧は、夜の間に晴れて、八塩山では、血潮のように色濃く、峰の紅葉の葉が赤く色づいている。

「八塩山」は、旧矢島町と旧東由利町の境にあり、紅葉の名所でした。「やしほ」「ちしほ」というリズムが、和歌に軽快さを加えています。

鳥海晴雪（晴れ渡った鳥海山の雪）

53 名残なく晴わたりけり鳥の海ふもとのしぐれみねのはつゆき

すっかり晴れ渡ったことですね。鳥海山の麓は一面に時雨でいるけれど、峰には初雪が白く輝いています。

「時雨」は、秋の終わりから初冬にかけて、降ったりやんだりする冷たい雨のことです。

谷月（谷の月）

54 さしのぼるみねの月影身にしめていざ谷の戸のあくるまでみむ

山のいただきに昇る月の光を、この身に染み込ませながら、さあ、谷の戸が開くまで、月を眺めています。

「谷の戸」とは、谷の地形が細長いことから、谷の入口のあたりを戸に見立てたものでしょう。

橋月（橋の月）

55 みちのくの絶の橋のあやふさもやすきに渡るあきの夜のつき

陸奥の途絶えの橋は、行き来が途絶えてしまうという名を持つ橋です。でも、その不安も関係ないかのように、秋の月はやすやすと渡っていきます。

「途絶えの橋」は宮城県にある歌枕です。

浦月（海辺の月）

56 てるつきのかけをやどしてよもすがらみるめやからむそでの浦人

照る月の光を、波に濡れた袖に映しながら、一晚中、袖の浦の漁師は、海松布という海草を刈るように、人目を避けて恋人に逢っているのでしょうか。

「袖の浦」は山形県にある歌枕です。この地名は、袖が波に濡れることから、涙にくれる人物を表現するのに用いられました。

川月（川の月）

57 色ふかきなまにつきの影とめてあきはひかりのまさる玉川

水の色濃い波間に、月の光をつなぎとめて、玉川は、秋にはその光がいつそう輝くことです。

「玉」は光り輝く宝石のことです。その名を持つ玉川だから、いつも光っているだろうという気持ちですが、和歌の前提になっています。

里月（里の月）

58 衣うつおとはたゆみて更るよのつきかげたかき秋しの、さと

衣を打つ砧の音も滞りがちになって、秋篠の里では、夜更けの月の光が高く輝いています。

夜も更けて、砧をたたいている人も眠ってしまうのでしょうか。

名郷月（有名な土地の月）

59 いかばかりすみまざるらむ久かたのかつらのさとのあきのよのつき
 どれほど澄みきつていることでしょうか。桂の里に出る秋の夜の月
 は。

「桂の里」は京都の歌枕で、月の名所です。「久方の」は「光」「空」
 などにかかる言葉で、ここでは「月」にかかっています。このような
 言葉を、「枕詞」といいます。なお、中国の伝説では、桂は月の世界
 にある木といわれています。作者には、月の桂がイメージされている
 のでしょう。

九月尽（九月の終わり）

60 くれてゆく秋の名残やをしむらんうらみがほなるのべのくずの葉
 暮れゆく秋の、名残を惜しんでいるのでしょうか。まるで恨み顔の
 ように見える、野原の葛の葉ですね。

「葛」は葉が風にひるがえると、葉の裏の白さが目立つことから、
 別名を「裏見草」といいます。そのことから、葛は「恨む」とかけて
 用いられます。

初冬（冬の初め）

61 吹そむる今朝だにはげし雪あられさそは、いかに冬のやまかせ
 冬の山風は、吹き始めの今朝でさえ、とても激しかった。雪やあら
 れをとまなつて吹くようになったら、どうなることやら。

「山風」は、山からふもとへ吹き下ろす風のこと、
 「山おろし」ともいいます。

落葉（落ち葉）

62 さらぬだにもろき木の葉をそよそよと櫛のはかしはなにさそふらむ

ただでさえ、もろくて落ちやすい木の葉たちであるのに、そよそよ
 と音を立てて、櫛の葉や柏の葉は、どうして他の葉を誘って落ちるの
 であろうか。

櫛や柏の葉は落ちにくいのですが、落ちるときには、他の葉も道連
 れにしていまいます。

朝落葉（朝の落ち葉）

63 ねぐら出る小鳥とみしはこがらしの枝にとまらぬもみぢなりけり
 巣を出る小鳥かと思えたのは、木枯らしが吹いたので、枝から離れ
 て散った紅葉でしたよ。

このように、対象を他のものになぞらえて表現することを「見立て」
 といいます。

聞落葉（葉の散る音を聞く）

64 散おとのかぜにいられて花よりもこゝろざさわぐ庭のみみぢ葉
 散る音が、風に運ばれて聞こえてくるから、わが庭の、紅葉した葉
 が散るのは、春の花が散るよりも、心が騒ぐことです。

「散る」ものの代表は「桜の花」ですが、聴覚にこだわって落葉を
 取り上げたのがこの和歌の新しさです。

時雨（時雨）

65 月影のすみすてしよりふはのせきしぐれの雨ぞよなよなにもる
 月の光が、見捨てて住まなくなつてからは、不破の関も時雨の雨が、
 夜ごとに漏れてしまうことです。

「不破の関」は有名な関所であり、歌枕です。「破られることはな
 い」とその名前にあるのにと、からかうような口調の和歌です。

江寒芦（入り江の寒々とした芦）

66 そらさむみかれ葉残らずをれふしてなにはあしは月もさわらず
空が寒いので、枯れた葉は残らず折れ曲がってしまい、難波江の葦は、月の光さえも触れることができないほどです。

「難波」は歌枕で、古くから港として開けていました。低湿地が多く、難波草とも呼ばれる葦が、一面に生い茂ることでも有名でした。

懸樋水（懸樋の水も凍って）

67 一つのまに氷とちけん山ざとのかけひの水のおとたゆるまで
いつの間に凍ってしまったのだろうか、山里の懸樋の水の音が絶えてしまうほどに。

「懸樋」とは、水を引くための樋のことです。竹筒でつくられ、自然の湧水や小川から台所に水を引くのに使われました。

池水半氷（半ば凍った池の水）

68 むれ立しをしの浮ねのあとみえてなかば氷れる庭の池水
群れて飛び立った鴛鴦が、身を浮かべて寝ていた跡は、その温もりのため凍らずに残っているものの、半ばは凍っている庭の池の水です。

鴛鴦は一夫一妻であることから、「おしどり夫婦」の由来となつています。夫婦や男女が仲良く連れ立っているようすを表現するときに用いられます。そのような場所は、その温もりで凍ることもありません。

竹雪（竹の雪）

69 なびくにはやすき姿の中々にをれぬぞつよき雪のなよ竹
なびくのはたやすい姿のなよ竹ではあるが、かえって、雪にも折れない強さを持つことですよ。

「弱竹」とは、細くしなやかな若竹のことです。柔軟な強さを持つていて、折れることはありません。『竹取物語』でも、結局はどの

貴公子の求婚も受け入れず、月に帰っていく主人公の名が、「なよ竹のかぐや姫」でした。

松雪（松の雪）

70 はらははずば下折なましされど猶ちらすもをしき松の雪かな
雪を払わなければ、きつと折れて垂れてしまうでしょう。それでもなお、払って散らしてしまうのも惜しいほどの松の雪です。

暖かい地方の人にとっての雪は、目を楽しませるものとして和歌、俳句、文学、絵画などに取り上げられ、その生活を豊かにしてきました。寒冷地に住む逸女も、和歌を通してそのような感覚を身に付けているようです。

深雪（深い雪）

71 まがきだに山とつもれば近してふ雪の隣も名のみなりけり
垣根ですら、雪が山のように積もると埋もれてしまい、お隣との境も見えなくなります。雪が降ると、お隣といっても名前だけのものです。

少し理解しにくい和歌ですが、逸女は他にも「雪のためにお隣が近くなる」という意味の和歌を作っています。当時の人々の、雪や隣人に対する思いが表れているのかもしれない。

72 とふ人のあらぬあはれもいとしくつもりにけりな雪の山ざと
訪れる人のいない寂しさも、ますますつゆります。雪の山里には、

ひどく雪が積もったことです。

柳宗元の漢詩「江雪」の「千山（すべての山に）鳥飛ぶこと絶え

万径（すべての道に）人蹤（人の足あと）滅す」が思い浮かびます。

行路雪（行く道の雪）

73 ふれど猶ほのかにみゆる旅人のあとこそ雪の道しるべなれ

雪が降ってもなお、ほのかに見える旅人の足跡は、雪の中での道しるべです。

大雪を体験した人間ならではの心細さと、わずかばかりの心のよりどころという思いが、実感として伝わってきます。

鷹狩（鷹狩り）

74 はし鷹のしらふもわかずしら雪のそでうちはへてかへる狩人

腕に載せたはし鷹の白い斑も、降り出した雪に紛れて見えなくなるほど、白雪が袖に降りかかる中を、狩人が帰っていきます。

「はし鷹」というのは、狩りに使われた小さい雌の鷹のことです。

冬月（冬の月）

75 さはるべき軒のよもぎは霜がれてもる影さむし冬の夜の月

月の光をさえぎるはずの、軒の蓬は霜に枯れてしまい、漏れてきた冬の夜の月の光が寒々しく感じられます。

「蓬」は、「浅茅」や「葎」とともに、荒れ果てた住居を描写する代表的な草であり、「蓬生」という和歌の用語も生まれました。

池水鳥（池の水鳥）

76 冬の池にむすぶ氷のうちとけてふる夜なしとやをしの鳴らん

冬の池は、氷が張ったまま溶けないものだから、うちとけて仲むつまじく過ごす夜がないと、鴛鴦が嘆いて鳴いているようです。

氷が「うち溶ける」に、夫婦仲の良いといわれる鴛鴦が「うちとけ

る」をかけたものです。

霰（霰）

77 しら玉かなにぞと、へば小笹はらそよとこたへてちるあられかな

「あられは白い寶石なの？何なの？」と聞くと、小さな笹が生える野原で、「そようよ」と答えて、霰が散っていきます。

「しら玉かなにぞ」という言葉は、『伊勢物語』の「芥川」というお話で、はじめて「露」を見たお姫さまが、彼女を連れて逃げる男にたずねる言葉です。この和歌は、その場面を引用した上で、「霰」にアレンジしています。

袞（かけ布団）

78 物おもふ冬の夜ごろは重ねてもひとりぶすまのかせぞさむけき

物思う冬の夜は、掛け布団を何枚重ねても寒いことです。一人で掛ける布団に吹く風は寒いから。

「袞」というのは、夜寝るときに体を覆った薄いかけ布団のことです。

うづみ火（灰の中にうずめた炭火）

79 かひなしや下にこがる、うづみ火のきえうへるとも人ししらねば

どんなに心の中で恋い焦がれてみても、甲斐のないことですよ。私の恋の火が消え失せたとしても、あの人は知らないのですから。

「火」は「思ひ」との掛詞で、恋する気持ちを表します。ですから、「うづみ火」は人に知られぬ恋のことです。

網代（網代）

80 ひをのぼるうちの川かぜさゆるよのあじろは月にまかせてぞもる

氷魚がさかのぼる宇治川の、風が寒々と冴える夜は、網代の見張りを月に任せてしましましょう。

「氷魚」は鮎の稚魚。宇治川でとれるものが有名で、天皇にも献上されました。「網代」は、竹や柴を編んで川に立てつらねて魚をとらえるしかけです。

雪中遠情（雪の中はるかに思う）

81 かきくらしふるしら雪にみわの山杉のしるしもいかにとぞおもふる

悲しみにくれてすこす中、降る白雪のせいで、三輪山の杉の木のしるしもどうなっていることかしら、見えなくなっているのではと思う。

『古今和歌集』にある、「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（私のそまつな庵は、三輪山のふもとにあります。私を懐かしく思ったら訪ねておいでなさい。杉の木の立っている門がそれですよ。）の和歌をもとにしたものです。ここでは、誰も訪ねてこないさびしさを表現しています。

冬動物（冬の動物）

82 ねざめして聞ぞわびしき冬の池のこほりにむすぶをしのひと声

夜、寝覚めて聞くのはわびしいことだ。冬の池の水から聞こえてくる鴛鴦の一声を。

鴛鴦は夫婦仲のよいものの代表と考えられています。作者は、たった一人でその声を聞くのがたえられないのです。

梅花先春（梅の花が春にさきがける）

83 うぐひすの声待かねて歳の中にかをり出たり梅のはつはな

鶯の声を待ちかねたのか、梅の初花が年の内に花の香りを漂わせたことです。

旧暦では、一月から春となります。新年も迎えないうちに、最初の梅の花が咲き香ったという情景です。

歳暮（二年の終わり）

84 行としの数をかぞへて山ざとにはるといふ名のたつをこそまて
過ぎていく年の数を数えながら、山里で春がやってくるのを、待つていることです。

「立春」という言葉にも残っているように、新しい季節がやって来ることを「立つ」といいました。

初恋（初恋）

85 けふそでにかゝるべしとはおもひきやきのふはしらぬ恋のあだなみ
今日、私の袖にかかるとは思ってもいませんでした。昨日までは、知ることなかった、むやみに立ち騒ぐ恋心という波が。

「徒波」というのは、むやみに立つ波のことで、変わりやすい人の心にとえられます。この初恋の行く先に不安を感じているのです。

86 ゆく末もしりえぬ恋の山道をなにをしろにおもひいりけん

行く末も知れない、恋の険しい山道なのに、何を道しるべとして、私は入り込んでしまったのでしょうか。

この和歌にも、前の和歌と同じように、恋にとらわれた戸惑いと不安が描かれています。

逢恋（逢う恋）

87 逢事のうつゝとわかでたどるかなみしよなよな夢のならひに

あなたと逢うことが、現実ともわからないままで、迷いながら行くことです。毎晩毎晩、見ていた夢の中の習慣のように。

夢なのか現実なのかもわからないほど、恋に溺れているようすが描かれています。

夕待恋（夕方に恋人を待つ）

88 関守のうちぬる宵もあるものをなど待人のつれなかるらん

関守が、うとうとと寝てしまいう夜もあるだろうに、どうして待っているあの人はつれないのでしょうか。

関守は関所を守る役人のことで、和歌などでは、男女の逢瀬を妨げるものをたとえています。その関守の目を盗んで逢いに来て欲しいという思いです。

忍恋（忍ぶ恋）

89 しろといふまくらはとまれ世に包む衣のそでよなみだもらすな

私をよく知る枕はともかくとして、世の人に知られないように、包み隠すべき衣の袖よ、私の忍ぶ恋ゆえの涙を漏らさないでおくれ。

「枕」はもつとも身近にあるものですから、擬人化して「忍ぶ恋を人に知らせるな」と呼びかけたりします。

待不逢恋（待っても逢えない恋）

90 槓の戸のさして待すばあけがたの夢にも人のいり来んものを

槓の戸を閉ざさないうで待ったならば、明け方の夢にでも、あの人が入ってきたらうものを。

「槓」は檜や杉など、常緑の針葉樹のことをいいます。堅いので建築材として使われます。

憑恋（頼みとする恋）

91 いつはりもなき世ならねど頼かなおのがまことの心ならひに

偽りのない世ではないけれど、あなたの心を信じていますよ。私のあなたに対する真実の心を、お手本として。

「まこと」という言葉よりも、「いつはり」という言葉が使われた和歌が多いそうです。「たのむ」に「憑く」という字を充てているのも、溺れがちな恋の本質をあらわしています。

見恋（一目惚れ）

92 玉すだれほのみし人のおもかげをこゝろにかけて恋ぬひぞなき

美しい簾のように、ちらと見たあの人のお顔を、心にとどめて、恋い慕わない日はないことです。

「玉」の語源は「魂」といっしょです。だから、接頭語となつて魂の宿る神聖なものという意味を加えます。

別恋（別れ際の恋心）

93 あひおもへば人もいそがぬ別路に心をつくるかねの音ぞうき

互いに思っている、誰も急がぬ分かれ道なのに、もののあわれの気持ちを起こさせる、鐘の音がつらいことよ。

毎日、何度も鐘の音が響いていたはずですが。このように和歌に表現されるのは、その瞬間が作者にとって重要な意味を持つからです。

久祈恋（久しく祈る恋）

94 いのれども関守神のゆるさねば猶こえがたきあふさかの山

祈っても、関所を守る神が許さないから、なおさら越えにくい、逢坂の山であることよ。

逢坂山は、今の天津市の南にある歌枕です。ふもとには、「逢坂の関」が設けられていました。和歌では多く、男女が「逢ふ」ことにかけて用いられます。

寄海恋（海に寄せた恋の歌）

95 みるめかるなぎさしあらばひとりねのなみだの床の海もいとはず
海松布を刈る渚のように、人目を避けてあの人と会える場所がある
ならば、独り寝の涙に沈んでいる、床の海もいやではありません。
「床の海」は、悲しみのあまり涙を流し、寢床に涙が海のようにあ
ふれるという意味です。

寄川恋（川に寄せた恋の歌）

96 あふ事はよどみはてたる中川にながる、水はなみだ也けり
あなたに逢うことは、もうできなくなってしまう。そんな二人の
間にある中川に、流れている水というのは、私の涙なのですよ。
「涙川」という言葉があります。物思いをして涙があふれるように
流れるようすを川にたとえた言葉です。

寄山恋（山に寄せた恋の歌）

97 身をうしとおもひいりても鈴鹿山ふりすがたき恋をするかな
この身を、つらいものと思つて分け入ったけれども、この鈴鹿山で
は、振り捨てがたい恋をすることです。
「鈴鹿山」には「鈴鹿の関」があり、歌枕の一つです。「鈴」と、
それに関わって「振る」という縁語が詠み込まれています。

寄井恋（井戸に寄せた恋の歌）

98 いはずともくみてしれかしむさしの、ほりかねの井のふかきこゝろ
を
言葉に出していわなくとも、気持ちを決んでわかってください。掘
りかねの井戸のように、私は深い心を持っているのですから。掘
武蔵野にあったという「掘りかねの井」とは、「掘りかねる」とい

う意味で、掘っても掘ってもなかなか水が出ないため、皆が苦勞して
やっと掘った深い井戸だったそうです。

99 手にむすぶまではなくとも山のみのあかぬかげだに見るよしもがな
手で直接水をすくうように、深い仲となることまではできなくとも、
山の清水の関伽という言葉ではありませんが、満足できないまま別
れたあなたの、面影だけでも見る手だてがあればよいのになあ。

「関伽」とは、仏様に供える神聖な水のことをいいます。「むすぶ」
「あか」「かげ」は「山の井」の縁語になります。

寄里恋（里に寄せた恋の歌）

100 今よりはすみやかひましおもふ事いはでしのぶのさとの名はうし
これからは、住むところをかえようかしら。つるる思いを言わない
で忍ぶという里の名はつらいから。

「岩手」「信夫」は、ともに東北の地名で歌枕になっています。

寄草恋（草に寄せた恋の歌）

101 すみのえのきしにはふてふ草の名を人のこゝろにまかせずもがな
住の江の岸に生い茂っているという「忘れ草」の種を、あの人の心
には蒔かせたくないものです。

「忘れ草」とは、萱草の別名です。身に付けると心のつらさを忘れ
ると考えられていて、恋の苦しみを忘れるため、下着の紐に付けたり
しました。ここでは、あの人に忘れられないようにとの願いです。

寄魚恋（魚に寄せた恋の歌）

102 うをととなりて見まくほしきは測といふ人のこゝろのそこひ也けり
魚となつて見たいのは、川の淵のような、あの人の心の、奥底の思

いですよ。

「淵(淵)」は深い所で、「瀬」は浅い所です。淵では水が淀み、瀬では「早瀬」というように流れが速くなります。和歌では、ともに、人の思いをたとえるのに使われます。

恋扇(恋の扇)

103 いかなりし扇のかぜの身にしみてわすれぬ恋のつまとなりけん
いったい誰のどのような扇の風が身にしみて、忘れられない恋のきつかけとなつたのでしょうか。

「扇子」は日本人の発明で、涼をとるためのものと、けがれをはらうための祭事用のものがありました。扇面に絵や和歌をかけた鑑賞用のものも作られ、贈答に用いたり、神仏に献上したりしました。

返書恋(恋文の返信)

104 この葉のうけひくまではかたくともあはれとは見よ水ぐきのあと
私の言葉を承知することまでは難しくとも、私の筆の跡を、せめてあわれだと思つて見てください。

「みづくき」を筆の意にとり、「水茎の跡」で筆跡の意としたところから、枕詞のように「跡」「流れ」「行方も知らず」などを形容する言葉として用いられました。

出色恋(態度に表れた恋)

105 なに、今うつしてみせむあだならぬこゝろのいろにそめしおもひを
何に今、映して見せましようか。いいかげんではない、本気の恋に染まった私の心の思いを。

「色」には、「表情」「態度」「気配」などの意味があります。ですから、心の中で思っていることが、顔やそぶりに表れることを、「色

に出づ」と表現します。

飛心離恋(心が離れていく恋)

106 咲はなのこずえはなれて玉かづらはえなき枝に何かゝるらん
咲く花は梢を離れて、見栄えもしない枝にどうして落ちかかるのでしょうか。

恋人の気持ちだが、他の人へと離れていくことをたとえた歌だと考えられます。「玉鬘」は、玉で作った髪飾りで、それを頭にかけてころから、「懸く」にかかる枕詞となっています。

稀恋(めつたに逢えない恋)

107 あふ事はよし七夕にならふともとの渡りのたがはずもがな
あなたと逢うことは、たとえ七夕と同じようにまれであるとしても、一年に一度のめぐり逢いは、毎年間違はなくあつて欲しいものです。

陰曆七月七日の夜、牽牛と織女の二つの星が、年に一度逢うといわれています。それを祭る行事が「七夕」で、逢うことがままならない恋人たちのたとえとなっています。

見夢恋(夢に見る恋)

108 中々になぐさまれけりあふとみるゆめはひとめの関しなれば
かえつて心が慰むことです。あなたと逢う夢には、人目という関所が無いのですから。

「夢路」といって、夢の中には行き通う道があると考えられていました。相手が自分のことを思っていれば、夢路を通つて逢いにくると信じられていたのです。都合のよい解釈ですね。

偶逢恋（偶然出会う恋）

109 すえ遠くたのむもはかなわくらばにあひみる事を玉のをにして

二人の恋の行く末を、遠く期待するのものはかないことです。ですから、偶然に逢えることを、命がけのことに思っています。

「玉の緒」とは「命」のことです。「玉」に「魂」をかけて、魂を肉体につなぎとめる紐の意から、この意味が生まれました。

寄竹述懐（竹に寄せて思いを述べる）

110 数ならぬ身のことの葉もくれ竹のよにとまるべきひとふしもがな
もの数でもない私の言葉であっても、二人の間に思い出として残る一言であってほしい。

「くれ竹」の縁語が「よ」「節」です。さらに、「よ」には、男女の仲を表す「世」と「節」（節と節の間の空洞）の、二つの意味が込められています。

井水（井の水）

111 くみにこす人しなればふか、らぬ身にもすみよき山の井のみづ
汲みに来る人もいないので、ものの道理もよくわからぬわが身にも、心清らかに住みやすい、山の井の水よ。

「すみ」は、水が「澄み」と人が「住み」の掛詞になっています。

庭竹（庭の竹）

112 夢さむるみぎりの竹は明ぬるとおどろかしてや露はらふらむ
夢から覚めた庭の竹は、夜が明けたとはつと気付かせるために、露をざつと振り払っているのでしょう。

「驚かす」には、「びっくりさせる」だけでなく、「気付かせる」「目を覚まさせる」といった意味もあります。

山（山）

113 幾世、のちりをかさねて白たへの名にふりにけんふじの柴やま
富士の山は、いったいどれだけの世代の、ちりを重ねて高い山となり頭に雪をのせたから、「白妙の」という名が、世間に言いならわされることになったのだろうか。

「富士の山」は歌枕の一つです。古くから霊峰とされ、和歌に詠まれるだけでなく、古典にもしばしば現れます。

川（川）

114 行末は幾せになりぬみなかみは木の葉がくれのたにの下みづ
下流では、いったいいくつの浅い瀬になるのだろうか。上流では、谷川の下深く流れる水は、木の葉に覆われて隠れているけれど。

「下水」は、心に秘めた思いをいいます。この歌も、秘めた恋心がやがて知られてしまうと解釈することもできます。

115 尋くる人かげもなしむぐらはえよもぎがそまとあれしふるさと

訪ね来る人影もない、葎が生え、蓬が生える山里となった、荒れ果てたふるさととは。

古文では、「古里」を「生まれ故郷」ではなく、「旧都」や「古くからのなじみの土地」などの意味で使うことの方が多いようです。

天橋立（天橋立）

116 よろず世はかけてもくちず常盤なる松をはしらのあまのはし立
万代も、けつして朽ちることはありません。常緑の松を柱とした天の橋立は、永遠に変わらないことでしょう。

「天の橋立」は、「松島」「厳島」とともに、日本三景の一つとして有名な歌枕です。「松」は常緑樹であるところから、永遠とか不変の

象徴とされます。千年の長寿を保つといわれ、強い生命力を表現します。

名所瀧（名所の滝）

117 くりかへし幾世へぬらん名に高きおと清水のたきのしらいと

繰り返し幾つの代を経たことだろう。世に名高い音をさせ、清水の瀧は白い糸のように流れている。

「清水寺」の奥の院の下にかかる「音羽の瀧」は、寺の名前の由来ともなっており、病気に効くとしていまなお祈願する人が絶えません。「清水」や「瀧の白糸」は、清水寺に限定して用いられる言葉ではありませんが、「名所」とあることから清水寺と解釈しました。

寄道祝（和歌の道を祝う）

118 あたらしきこゝろもとめていそのかみふるきをしのぶしき嶋の道

新しい心を求めて、古い心をしのぶのが、和歌の道ですよ。

「石の上」は、今の奈良の地名です。ここには「布留」の地があったことから、同じ音の「古る」「降る」などにかかる枕詞となりました。「敷島」は日本の国の別名ですので、「敷島の道」は「和歌の道」をいいます。

無常（無常）

119 なげかしき散もかくるもはるあきの月花とみる夢の世の中

残念ながら、花が散ったとしても、月が隠れたとしても、春の花や秋の月と違って見ましようよ。夢のようにはかない世の中なのですから。

「雪月花」という言葉があります。四季折々に楽しむ、よいながめのことです。それはまた、日本の伝統的な美に関する意識をあらわす

言葉でもあります。

120 書つめし数はつもれどもしほ草よに残すべきことの葉ぞなき

いつ子（逸子・後藤逸女）

書いた和歌の数は、積み重なって多いけれども、この『藻塩草』には、世に残すべきほどの和歌は無いことですよ。

「言の葉」には、「言葉」だけでなく「和歌」という意味があります。最後に後藤逸女は、自分の和歌に対する謙遜の気持ちで歌集をとりまわっています。